

まつか

SHINGON

平成十年十二月十六日第三種郵便物認可　第八十九号　平成二十九年六月一日発行　年四回（六月・九月・十二月・三月の一日）発行

［特集］

お盆を迎えて

～七回忌を迎えた被災地の現状とこれから～

Vol. 89

真言宗智山派

Vol. 89 生きる力 SHINGON
仏さまに祈り 仏さまと出会う

目次

今日の法語 髙野照晃……2
智山寺院探訪 赤亀山延光寺……3
特集　お盆を迎えて
～七回忌を迎えた被災地の現状とこれから～…6
お大師さまとご信仰 田村宗英……10
いただきますの心 音羽和紀……11
図解・仏教ガイド 「マンガでわかる十三仏⑦」
え・悟東あすか……12
ゆーけいの写仏をするよろこび
牧　宥恵……14
日本の四季を切り取る十七文字
星野高士……15
総本山の便りをお知らせします……16
私の夫はお坊さん 大塚哲子……18
ごくらくらくご 三遊亭竜楽……19
御詠歌で綴る十善戒の教え
佐々木眞光……20
読者アンケートから・おしらせ・編集後記……22
真言宗智山派出版刊行物のご案内…23
曼荼羅の仏たち 小峰彌彦……24
刮目！　仏教体験記 内藤理恵子……26
花に聞く 仏に聞く 佐々木隆元……28
仏教と妖怪 今井秀和……29
やきものをたのしむ 柳田栄萬……30
この書の弘法大師 飯島太千雄……31

仏教について　仏教と文化
わたしたちの生活と仏教　お知らせ

表紙写真　朝露の田とノウゼンカズラ

冷え込んだ朝、稲の葉先に無数の朝露が光っています。その奥に咲くノウゼンカズラの花が、田んぼの緑に映え、色鮮やかです。農家の方が作業の手を休めた時に眺めるため、杉の木に絡ませて育てているのでしょうか。

新潟県魚沼地方は日本有数の米どころです。

表2写真　ハスとミツバチ

雨上がりの早朝、花ハスの畑を訪ねてみました。ピンクや白のハスの花が夏を彩ります。そんな中、ミツバチたちはせっせと働いており感心です。遠くの山には霧が流れています。

福井県南越前町の南条では、花ハスの出荷が盛んです。

撮影・解説／佐藤尚



今日の法語「酉」

髙野照晃（徳島県鳴門市　成田山徳島分院光輪寺住職）



今年の十二支である「酉」という字は、酒を醸造する器の象形文字で、甕の中に溜まっている麹の発酵を意味します。

私たち一人ひとりの心の甕の中には、本来ご先祖さまの〝いのち〟と、先人たちの〝教え〟が溜まっています。しかし、この心の甕にはさまざまな自身の迷いや、執着という塵が付着して成熟をさまたげています。それを、丁寧に取り除いていくことによって、熟成した黍からよい酎酒がつくられるように、心の中からよい成果が醸成されてくるのです。

酉年の守り本尊は不動明王です。お不動さまは、我々の迷いや執着を、燃えさかる火炎と右手の利剣で断ってくださいます。



Y字の参道右手に本堂が見えてくる。左手奥には大師堂がある。

智山寺院探訪

四国八十八ヶ所霊場
第三十九番札所

高知県宿毛市 赤亀山延光寺

JR高知駅に到着。車体外装に「アンパンマン」が描かれた在来線特急に乗り換え、目指すは高知県西端の宿毛市である。二時間ほどの列車の旅だ。アンパンマン列車に乗ることができて大喜びをしている子供を眺めながら、これから訪れる延光寺のことを思い浮かべた。

「延喜十一年（九一一）赤亀が鐘を背負い当山にこれを納める。重要文化財に指定される。この時より山号亀鶴山、寺号宝光寺を赤亀山寺山院延光寺と改める」（「寺山延光寺由緒略記」より）

竜宮に棲む赤亀が梵鐘を背負って

高知県に限らず、四国には、数多くの「浦島太郎伝説」が残っている。「浦島太郎」といえば〝亀〟であるが、今回訪れる延光寺（高知県宿毛市）は、〝亀〟にとても縁の深い寺である。

境内に入ると参道がY字に延びており、その右手に本堂が見えてくる。ユニークなアプローチだが、参拝者の緊張をほぐすような、ある種の安心感を与えてくれる配置だ。境内で最初に目を惹きつけられるのが、梵鐘を背負った大きな赤亀である。平安の中期に竜宮に棲んでいた赤亀だという。この赤亀が銅の梵鐘を背負って海から出てきたので、当時の僧侶たちが、延光寺に奉納したそうである。梵鐘には「延喜十一年正月」の銘が刻まれ、現在は国の重要文化財に指定されている。この梵鐘は普段は保管庫に収蔵されているのだが、今回は延光寺ご住職のお計らいで、特別に現物



山門。四国八十八ヶ所霊場第39番札所、高知県最後の霊場である。お遍路さんにとっては前の札所（38番金剛福寺）から70キロ以上の行程である。



赤亀山延光寺。赤い亀が背中に梵鐘を乗せて、竜宮城から来た……。

のフェリーが運航されていることからもわかるように、高知県の西端に位置し、また四国の南端でもある。四国といえば「四国八十八ヶ所霊場」が有名であるが、ここ延光寺も八十八ヶ所霊場に名を連ねている。

四国霊場は阿波の国（徳島）の霊場が「発心の道場」、土佐の国（高知）が「修行の道場」、伊予の国（愛媛）が「菩提の道場」、讃岐の国（香川）が「涅槃の道場」といわれている。延光寺は四国八十八ヶ所霊場三十九番札所、「修行の道場」最後の霊場である。

「寺山延光寺由緒略記」によれば、神亀元年（七二四）に行基菩薩が聖武天皇の勅命を受けて、本坊及び十二ヶ坊を建造され、ご本尊薬師如来は行基菩薩の自作とされている。

弘法大師（空海）が延光寺を訪れたのは延暦十四年（七九五）、日光・月光菩薩像を安置して、七堂伽藍を整えたという。このときに、弘法大師はこの寺に浄水が乏しいことを嘆かれ、地を掘って加持したところ霊水が沸き出たので「宝医水」と名付けた。この霊水が今も延光寺本堂右手に残る「眼洗い井戸」であり、眼病に効くとされ、霊水を求めお遍路さんのみならず、遠くの地からも参詣者が多く訪れるという。

お大師さんと「眼洗い井戸」

延光寺のある宿毛市は、大分県の佐伯港と

を拝見することができた。

総高三十三・六センチメートル、口径二十三センチメートルの小柄な鐘であるが、思いのほか艶のある深い青緑色が重厚な存在感を放っている。



眼洗い井戸。置かれた柄杓ですくい目を洗うお遍路さんも多いが、参拝できない家族の方のために、井戸の水をペットボトルに入れて持ち帰る人もいるそうだ。



境内のどこに亀がいるのかを探すのも、この寺院の楽しみのひとつだ。

悠久の時を告げる鐘

さて、話を延喜十一年制作の梵鐘に戻そう。宿毛市立宿毛歴史館の情報によれば、この鐘は制作年を記した鐘では、日本で七番目に古い鐘だそうだ。高知県では最古の鐘である。この鐘については、「昔一匹の赤亀が小さな鐘を背負って海中からはい上がり、寺山にきてこの鐘を奉納した。それでこの寺の山号を赤亀山というようになった」という伝説があることは冒頭でも触れた。二十一世紀の現在、この話をそのまま信じる人はいないだろうが、宿毛歴史館の担当者が「弥勒寺（鐘の銘文にある寺院だが存在等詳細は不明）からこの鐘を略奪した海賊が仏罰を恐れて、赤胴色に日焼けした裸の背中でこの鐘を背負い（延光寺に）奉納したと解釈してはどうか」という興味深い仮説を立てている。

千百年前の鐘は、歴史研究家の浪漫心もくすぐるようである。

この鐘は、明治のはじめ高知県議会の開会と閉会の合図に打ち鳴らされていたこともあったという。寺の鐘が、なぜ県議会で使われていたのか？　風土記を紐解き合点がいった。土佐の歴史などに関する資料を百二十巻にまとめ、文化十年（一八一三）年に完成した『南路志』によれば「（延光寺は）明治四年神仏分離令のため廃寺となったが、明治二十二年に再興された」とのこと。土佐高知は廃仏毀釈の強かった地域である。おそらく寺宝である鐘は、その時期（県に）没収されていたのであろう。



総高 33.6 センチメートル、延喜 11 年（911）の銘が刻まれた梵鐘。国の重要文化財である。一般公開はされていない。

この鐘はどのような音色を千百年前に聴かせてくれていたのだろう。ちょうど住職が席を外されたので、その隙に、目の前にあるこの鐘を打ちたい衝動に駆られた。しかし、ふと、浦島太郎のエンディングを思い出し、その手を止めた。

お伽話の結末に子供は教訓を求めるものである。その点から考えると「浦島太郎」は奇妙な物語だ。亀を助けたというのに……。敢えて教訓を探せば「竜宮」という人智を超えた世界を経験した者に対する不可逆過程か。千百年という悠久の時の流れがこの梵鐘には詰まっている。

境内の亀に見送られ延光寺を後にした。

（智山教化センター所員／磯山正邦）

撮影／山下豊）



増田理英住職。延光寺 1300 年の法灯を護る。密厳流御詠歌の指導者として後進の育成にも注力されている。



ACCESS アクセス

延光寺

土佐くろしお鉄道平田駅から延光寺まで約2.7km。 駅を出て宿毛市街を目指す方向で国道56号線を走り、 バス停寺山口のところを右折。そのまま約1km直進し、正面にあります。

〒788-0782 高知県宿毛市平田町中山390

TEL 0880-66-0225

特集

お盆を迎えて

～七回忌を迎えた被災地の現状とこれから～



智山教化センター専門員
宮城県岩沼市　岩誓寺住職　佐藤雅晴

平成29年3月15日に、宮城県仙台市大聖寺で行われた、宮城教区東日本大震災七回忌法要の様子。

はじめに

東日本大震災より六年目を迎えました。被災した各地域では、災害が発生した三月を中心に慰霊祭や追悼式が開催されて、不慮の災害で犠牲となった方々の冥福を祈る行事が行われました。また、関係する寺院でも七回忌法要が営まれ、亡き肉親への供養が行われております。

今でも、被災地を回り、この六年間の状況に思いを巡らせると、そこに生えている草木一本から、道端にある一石に至るまで、無数の「声なき声」が宿り、「突然の生死の一大事」に直面した人々の姿が思い浮かぶような気持ちがいたします。

不運にも命を落とされた方々は、どんなにか生きたかったことでしょう。しかし、その気持ちを伝えることや声を上げることは、もうできません。

一命を取り留めた人々の中にも、深い絶望のために声を上げる気力すら失われ、人との交流が不可能になっている方々も数多くいらっしゃるといわれております。

東日本大震災に直面して生き残った私たちには「生きたい」「死にたくな

い」という思いを持ったまま旅立って行った方々の無言の叫びに思いを巡らせ、また、生きる希望を失いかけている方々には、生涯にわたり、謙虚に寄り添っていく優しさが求められているのではないでしょうか。



平成29年4月に撮影した、宮城県名取市閖上の観音寺墓地と名取市災害公営住宅。震災から6年経った今も、復興はなかなか先に進まないのが現状です。

復興の槌音の中で感じられること

暖かな陽光の中で穏やかな大海原を見ていると、大震災が発生し、大災害をもたらせた海と同じ海であることが、今でも信じられないという思いに駆られます。

平成二十三年三月十一日、午後二時四十六分、東日本大震災は発生しました。人々はその瞬間、いつ来てもおかしくないといわれ続けていた宮城県沖地震が、ついに発生したと誰しもが思ったのではないでしょうか。しかし、その揺れはあまりにも激しくそして長く、今まで経験したことのない大きな揺れに恐怖を感じました。そして、その後に発生した大津波は、私たちの想像をはるかに超える猛威を振るい、大きな被害をもたらしました。

平成二十九年四月一日現在、死者一万五千八百九十三人、行方不明者二千五百五十三人、後日死亡した関連死者は三千人を超え、津波や福島第一原発事故により、避難生活を続けている人々は、今なお十二万人以上に上るといわれています。

現在、どの被災市町村も、海岸線の堤防の補強工事やかさ上げ道路の建設、集団移転地の造成など、懸命に復興の努力をして、社会生活の再建に向け整備を進めておりますが、ある新聞のアンケート結果を読んでみると、復旧率は五十％程度と捉えている人々が多いようです。また、復旧に要する予算規模は、二十兆円に上るとされております。

この津波により、宮城県内では、耕地面積の十一％が数日間にわたり海水に冠水し、水田には住宅のガレキや流木などが流入して、耕作ができない状態が長く続きましたが、現在は圃場整備が進み、作付け可能になりました。しかし、海水の影響で、カエルやザリガニ、野ネズミなどほとんどの小動物が死滅してしまい、それを餌にしていたサギやタカなどの飛翔はほとんど見ることがなくなり、また、水田につきものだったカエルの鳴き声がしないなど、生態系の復元にはまだまだ多くの時間を必要とするように感じられます。

東日本大震災から七回目のお盆を迎えて

八月に入ると東北各地では、盛大に夏祭りが開催されます。盛岡さんさ踊りを皮切りに、青森ねぶた祭り、秋田竿灯まつり、山形花笠まつり、そして、仙台七夕まつりへと続きます。



被災地では、いまだ手付かずのところも少なくありません。私たちはこれからも被災地に心を向け続けなければなりません。

どのお祭りも町内会や地区ごとに、一年がかりで、お囃子や踊りの練習を積み重ね、衣装や吹き流しなどの装束、装飾を準備し、その日を迎えるそうです。その中で、地域社会の連帯意識や伝統文化に対する理解が図られ、助け合いながら生きるという気持ちが培われているように感じられます。

震災後、東日本大震災の機牲者の鎮魂と冥福を祈る目的で、東北各県の代表的な祭りを一堂に会した、「東北六魂祭」が開催されるようになりました。盛大な開催の中にも、参加者全員で、死者の御霊を悼み、成仏を祈ることを趣旨として、各県持ち回りで開催される「六魂祭」は、被災者を元気づけ、復興を目指す勇気を与えてくれたと感じています。

夏祭りが終わると、東北地方は朝夕の気温も下がり、秋の訪れが感じられるようになります。そして、お盆の時期を迎えます。

お盆は、密厳浄土へ旅立った人々が修行の手を休めて、思い出多いそれぞれの家に帰ってくる行事です。

また、故郷を遠く離れて生活している親類や縁者も里帰りをして旧交を温め合い、お墓参りやお寺参りをする行事です。

「仏説盂蘭盆経」というお経に由来する盂



七回忌の仏さま阿閦如来。悟りの心が揺るぎなく堅固なことを表す「触地印」（右手を地に着ける印）を結んでいます。

蘭盆会は、中国を経て日本へと伝わり、今から千三百年ほど前の推古天皇の時代に始められたと伝えられています。今年は東日本大震災から数えて七回忌の年に当たります。七回忌のご本尊は阿閦如来です。

阿閦如来は、かつて東方の国で 仏の説く六波羅蜜の教えに接し、「絶対に怒らない」という誓願を立てて菩薩行を実践し、悟りを得て、阿閦如来になったとされております。

今年は、お盆でご先祖さまを迎える日の夕刻に、ぜひ東方へ向かって合掌をしていただき、東日本大震災で犠牲になった方々のご冥福とご先祖さまの成仏をともに祈っていただきたいと強く思っております。

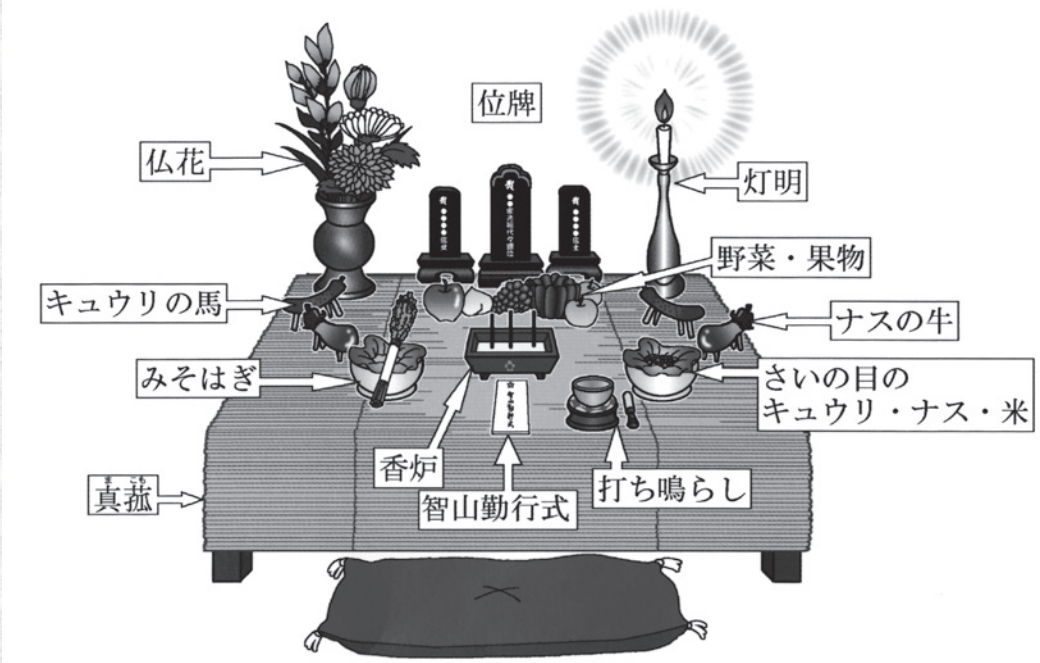
むすびにかえて

私たちは現在、価値観が複雑に多様化した中で生活することを余儀なくされています。その中で、伝統的行事や普遍性をもって生活することは多くの努力を必要とします。しかし、私たちの祖先も長い期間にわたって、時代の変化の中で普遍性を求めて生活をしてきたからこそ、今日の私たちに伝統的行事や思いが伝わってきたのではないでしょうか。

故郷の家は継承する人がなく、精霊棚を飾ってご先祖さまをお迎えすることができない人もいるかもしれません。

お盆の時期にそれぞれの家に戻れない精霊のために、本堂などに精霊棚を飾り、お盆供養をして精霊をお迎えしている寺院も多く見受けられるようになりました。お盆にはお墓参りとお寺参りを心がけていただき、墓前にて一年間の出来事をご先祖さまに報告し、ご縁を確かめていただきたいと思います。そして、生きていることへの感謝の気持ちとともに、ご先祖さまのもとで新たな発心をしていただき、充実した日々を目指していただければ、最高のご供養となるのではないでしょうか。

真言宗智山派では、「私たちは忘れない～ともに祈りつづけよう～」という思いのもと、被災地の復興と慰霊の祈りを込めた写経を受け付けております。くわしくは災害対策本部へお問い合わせいただくか、総本山智積院ホームページをご覧ください。



▲精霊棚（お盆棚）のまつり方の一例

平成十年十二月十六日第三種郵便物認可「生きる力のTENGON」第八十九号　平成二十九年六月一日発行　年四回（六月・九月・十二月・三月の一日）発行　定価一〇〇円（本体九三円）
発行人／芙蓉良英　編集／智山教化センター　発行所／〒605-0951 京都市東山区東大路七条下ル東瓦町九六四　総本山智積院内　真言宗智山派宗務庁

京都にお越しの際はぜひ 智積院会館をご利用ください



京都 総本山智積院

〒605-0951 京都市東山区東大路七条下ル東瓦町964
TEL：075-541-5361　FAX：075-541-5364

写経のつどい
毎月21日　13時より
於　金堂
納経料　千円

智積院阿字観会
14時より（受付13時より）
於　智積院金堂地下ホール
（参加費五百円・要事前申込）
6月2日（金）
7月12日（水）
8月4日（金）

宿坊 智積院会館
宿泊料金 6、670円
（朝食・灯明料・税込）
ご予約・お問い合わせ
TEL　075-541-5363
・JR京都駅よりバス約10分
・京阪電車七条駅より徒歩約10分

東京 総本山智積院別院 真福寺

〒105-0002　東京都港区愛宕1-3-8
TEL：03-3431-1081　FAX：03-3431-0203

愛宕薬師ご縁日（毎月8日）
※8日が土日祝の際は第一金曜日
・大護摩供法要　12時より
・写経会（納経料千円）14時より
※初めて写経に参加される方は13時30分までに受付にお越しください
7月7日（金）
8月8日（火）
※6月8日（木）は施餓鬼会（15時より）のため、護摩供・写経会はお休みです

やすらぎ寄席
毎月第3木曜日　18時30分より
於　本堂（木戸銭千五百円）
6月15日　三遊亭
7月20日　談志一門会
8月17日　三遊亭

真福寺阿字観会
昼の部15時・夜の部19時より
於　本堂（無料・要事前申込）
6月27日（火）　7月25日（火）
8月22日（火）

愛宕薬師フォーラム（無料）
6月23日（金）14時より
「臨床宗教師・傾聴・儀礼―《幽霊》への対応から考える―」
東北大学大学院文学研究科教授／高橋原先生

総本山智積院HP http://www.chisan.or.jp